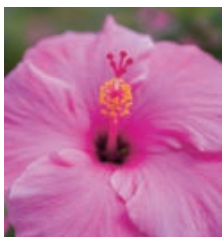


悪の浸透力



高木 徳 一

ぬるり、ポトン、ぬるり、ポトン……………
涙目で精を搾り出している。

さざ波が耳に心地好い。見守る満月に時折り薄雲が掛かる。時を刻むようにほぼ一定のリズムで白く輝く柔らかな卵が重なる。なおも。

立春（たつはる）はサンダルに短パン姿で、腰を下ろし、腕組みしながら見詰め続ける。生命の誕生に立ち会ったのはこれが生まれて初めてであった。一人娘の誕生の際は、妻が望んだが仕事多忙を理由に断った。当時はキャリアウーマンが進出していたが、立春としては、夫は外で稼ぎ、妻は家庭を守り、次代を担う子供を愛情豊かに育てるのが最善と考えており、当然出産も妻のひとコマと思っていた。海亀の産卵を目の当たりにして、妻の苦痛や喜びを共有すべきだったかと幾分後悔する気持ちになった。これも、深過ぎる人生を送ってきたからか・・・。

そういえば、海亀のオスは何処にいるのか。辺りを見回す。数匹が眼に入るが、傍で見守るオスはいない。砂を掛けていたり、海に戻ったり、穴を掘り始めたりしている。島の人によると、海亀は沖の瀬や岩礁に集まり、交尾をし、夜になって主に雌が産卵のため砂浜や草原に直径二十センチ、深さ六十センチの穴を掘り、一回に七十から百五十もの卵を年一回から十五回に分けて産むと。隔年に繁殖するが、精力絶倫の亀は毎年生むと言い、笑い飛ばしていた。五十日で孵化し、海へと向うが鳥、蟹、魚などに食べられ、七年目位の性成熟期まで生き残るのは百分の一から千分の一と厳しく、寿命は人間と同じ位と言われているそうだ。この確率で驚いてはいけない。

ヒトの場合、一回の射精で一億から四億程度の精子が精液中にいるのに、膣から子宮までに大多数が死滅し、数千から数十万しか到達出来ず、更に卵子までには数十から数百と極端に少なくなる。

最初に卵膜に辿り付いた精子が侵入し、受精となる。この時、表面膜が変化し、他の精子を拒む。一排卵周期ごとの受精率は約八十%だが妊娠率（着床率）は二、三十%と低下する。生まれ出ることの大変さ、育つていくことの難しさを考えてみれば、己がよくぞここまで生きながら得てこられたと感慨すら覚える。

海亀のオスは悠然と他のメスを追い駆けているのだろうか。立春はあの時の妻を思い出し、苦笑する。

一大事業を見終えた立春は腰を伸ばし、踵を返す。緩やかな坂道を上る。緑が漆黒の闇に溶けている。突如、網膜に光の乱舞が焼き付いた。黄金色が抽象画を描く。蛍だ。ざわざわと木々が騒ぐ。目印の古井戸が辻にあり、右へ曲がる。立春はその先の元麿屋に入った。

翌朝、日の出と共に起き出した立春は歳の割には筋肉の付いた身体に小豆色の海パンを身に付け、

昨夜の北側の浜辺の東にある岩礁に向った。陽光に煌く波の下のモズクを掴み取り、波に洗われている岩場のウニを剥がす。潜って、浅場のアワビも。ヤシガニを素手で捕まえる。帰り掛けに、小振りのパイナップルを失敬。小気味良い疲れを感じながら料理をして、自然の恵みに感謝しつつ、静かに食欲を満たす。一服した後、机の原稿用紙と対峙し、脳から吐き出される言の葉をマス目にくせ字で埋めてゆく。学生時代から夢見た晴耕雨読の生活。停年を五年残し、職を辞し、ここに移住したのだ。

昼には畠のトウモロコシをもちで茹で、マンゴーの甘さも口に運ぶ。

散歩がてらにタコノキだらけの密林に分け入り、巨人女が穿くスカートのような気根を色鉛筆で画帳に写しとる。戻ってきたらひと時、また原稿用紙とにらめっこ。夕陽が沈む前に、シュノーケルを使って潜り、モリで刺した赤いゴマフエダイの

刺身を目の前にして、ちびりちびりと泡盛を喉越しに入れる。夕餉がゆるりと過ぎてゆく。

ここは亜熱帯地域で沖には北上する黒潮海流が存在し、豊かな漁場となっている。カサゴ、メアジの類は磯釣りで引き当て、購入した中古のエンジン付き木造船で沖合いに出て、サヨリ、カツオも手にしたこともある。キハダマグロの大物も年に四、五回は引き上げ、近くの三世帯におすそ分けしたりした。

このようにして、朝日の出入りを繰り返して見ている。

葉書で連絡してきた八月十六日に、幼馴染の坂口圭がリュックを背負って縁側から明るく軽い声を掛けてきた。聞き覚えのある音調に敏感に反応した立春は振り返り、机から離れた。

「おい、圭か、よく来たな」と、顎を引いたように喋り出す。

「あー、今年も大潮の干潮を狙ってきて、隣の島

から歩いてきたぜ」「そういえば、昨夜は満月だったわ。ま、上がれや」

圭がああと言いつつ、麦藁帽子を取ると、自分とは違って頭頂部の細毛は一段と少なくなっていた。立春は卓袱台に麦茶入りコップを置き、イナゴの佃煮、パイナップル、バナナを勧めた。板の間に胡坐をかき、コップを傾けた後、圭はくすんだ茶色のリュックから荷物を取り出した。

「この白と赤のワインはボルドー産なんだ」
色白の手で立春に渡す。

「高かったんだろう」「スナック経営の次女が卸値で買ってくれたから安いさ。一本を一人で空けて、残り三本は後でやってくれ」

「悪いな、何時も」奥目だが、鼻は高い立春がラベルを一瞥し、礼を言う。

「動物の肉が不足してるだろうから、牛肉と鯨肉の大和煮、それに焼き鳥の缶詰も持って来た。ほら、缶切りもな」「圭は相変わらず気が付くわ」

生麵・乾燥麵と垂れ、おでんや味噌汁の素、緑茶・紅茶・コーヒーの袋、カレー・シチュー・マーボ豆腐の小箱、餃子、カステラ、饅頭、飴玉、煎餅などを台に広げてゆく。

「採りたてのパインの味は格別だな」「そうよ、こは魚にしろ、果物・作物にしろ新鮮さが取り柄だわ」やや尖った顎が上下する。

物品を片付けた圭の手が再びリュックの中をまさぐる。

「頼まれていた鉛筆、消しゴム、ボールペン、大穴ノートに原稿用紙だ」数が多いから重たかったろう。「なーに、衣類は下着しか入っていないから大丈夫だ。それに、最新の推理小説新人賞の単行本が二冊・・」「待ち遠しかったな、早速読んでみるよ。有難う」「今回の『逆回転の時計』のコメントも小説の後に簡条書きしてきた」

退職後の立春はマンションを引き払い、三世帯五人しか居住してないこの島の廃屋に住み、電気・

水道代を支払い、文明の利器は小さな冷蔵庫だけにして、一切の情報を遮断し、離島生活を開始したのだ。大穴ノートを横にして、一行おきに短編の推理小説を書き込んでゆき、書き終わると私設編集長の圭に郵送し、批評をして貰ってから新人賞に応募してきた。年に三作位を物にして、二次通過が四作あったが中々最終候補に上っていない。「圭さんは『てにをは』でなく、全体的にみて辛辣な評価をしてくれるから助かるよ」「批評の専門家でないが、読書は好きなんだ。小学生の時に友人の家にあった江戸川乱歩の『怪人二十面相』『少年探偵団』などに夢中になり、その後、『点と線』『ゼロの焦点』などを書いた社会派の松本清張に興味を持ち、また横溝正史のおぞましい事件が起こる『八つ墓村』『犬神家の一族』に背筋が凍る思いだった。テレビドラマのスリラー物の犯人とかトリックを見付け出すのは女房より早いぜ」「だったら、圭さんも書けば良いのに」

「いやー、読むと書くでは大違いさ、分かつてるくせに。文才が必要だからな。ところで、前回は医師会会長の一人娘を誘拐して身代金を要求する事件の本格推理小説だったが、今回はがらりと変わって犯罪者の内面に目を向け、高校の恩師を殺害する過程を描いた犯罪心理小説だな」「ああ、ささいなことが殺人の切っ掛けになる怖さを表現しなかった」「電話で女教師にデートを申し込み、十も年上の担任だし、同じ年代の人の中であなたに相応しいヒトがこれから見付かるわと断られたことが殺人の動機ではかなり弱いのでは」「彼は同級生二人に恋文を送り、返事がないことにショックを受けており、包容力のある魅惑的な担任なら一度位は誘いに乗ってくれ、癒してくれると思っていたからこれとの合わせ技で一本と考えたんだ」「だったら、その辺を詳しく書き込んだら」「そうだな。実は、一部は体験なんだ。浪人中に圭の家の前の原っぱでキャッチボールをしていたら、新

婚奥さんが犬の散歩で圭と挨拶し、その内自分も言葉を交わした。湯上りと思われる奥さんが原っぱでの盆踊り大会の櫓の上で笑顔を見せ、花柄浴衣から女性ホルモンが噴出し、くらっときて参ったな。一ヶ月は勉強が手に付かない。そこで、希望大学に合格出来たら必ずデートすると決意し、入学一ヵ月後に電話したら作中のような理由で拒否された。暫くは女嫌いになったな」

「全然知らなかったよ、大滝麗子さんのことだな。あれから十年後に旦那の転勤で静岡の方へ引越している。水臭いな、話してくれば慰めて遣ったのに」「そうすれば回復も早かったかも」

その他のコメントにも、圭は説明を加えた。夕食は二人で台所に立ち、たきぎを竈にくべて、うどんを煮炊きする。具はゴーヤ、車海老、鮑、海葡萄。互いの健康を祝し、赤ワインの舌こたえを感じ、うどんを啜る。

食後は縁側から少し欠けた月を見上げる。

「静寂に囲まれ、都云で消耗した心が癒されるわ」

「こうしていると仕事中毒だったあの頃が夢のように見えるよ」本当だな。鳴き声が聞こえてくるな「梟の一種のアオバズクだわ。鳴き声が単調で、ホッホウホッホウと言ってるだろ。同じ仲間のコノハズクの場合はブッポウソウと鳴くん」だ」

圭は鼻をくんくん鳴らしながら何か異様な匂いがあるなど立春の横顔に喋る。それは硫黄とナフタリン等で蛇の忌避剤を撒いたからと立春は説明した。更に追加する。

「何しろ、草むらはハブの天国だからな。東南アジアや中国は毒蛇でも食用にしてる。ここでは琉球ハブ酒が滋養、強壮に良いと飲まれているよ」

「毒があるのに」「アルコールで毒が消され、アミノ酸が豊富にあるんだ。一本あるから遣るか」

「いいよ、夢見が悪い。それに精力つけ過ぎで眠れなくなるからな。昼間にしよう」

顔を見合わせ笑い合う。

暫くして、板の間に薄い敷布団を敷き、上に椰子の木のある島を描いたタオルケットを置き、その間にランニングシャツで寝る。

翌日の朝は畠からほうれん草と茄子を取り、雑煮としやれ込んだ。

圭は餅を飲み込んだ証の喉仏の動きが終わってから、「お雑煮といえは正月だったが、最近では一年中スーパーでお餅を売ってるから便利になったもんだな」と喋った。「その代わり、正月の雑煮の有難さが薄れたのも事実だわ。時代の流れかな。何はともあれ、歯こたえ十分で満足だわ」「そりゃあ、良かった、持ってきた甲斐があったもんだ」

片付け後に休憩を入れてから、白い瓦に存在感を示すシーサーに見送られ、二人は海パンに救命胴衣を着け、釣り道具を運ぶ。二年前の夏に、トローリング用釣竿で針に疑似餌を付け、六時間後に小振りの鮪が食い付き、立春が引き寄せたところ、

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。